

パイロットと管制官からまなぶ流儀

対人援助職に関する学び方と心構え

長谷川明弘

(金沢工業大学 心理科学研究科)

はじめに

他の分野の書物を読んで、今携わっている仕事に対して触発されることがある。長谷川(2007)は、職人養成形式と専門職養成形式の特徴を紹介し、両者にわたる包括的でかつ柔軟な学び方の姿勢が対人援助職の姿勢(心構え)にも共通することを指摘していた。パイロットや管制官は、職人と専門職の両者を兼ね備えていると考えられる。本論は、「パイロット」と「管制官」を切り口に、対人援助職に関する学び方と心構えに関するテーマを提供する。

パイロットと基礎訓練(専門職養成)

高度科学技術の結晶ともいえるような航空機の離着陸は、未だ人間の操作によって行われている。航空機は、いったん飛び立ってしまうとコンピュータの制御によって運航の自動化がなされているに過ぎない。パイロットはある程度の訓練を受ければ、それなりに航空機を操縦することができるという。

対人援助職の養成では2段階の課程があるといわれ、その第1段階は、理論と面接技法を広範囲にかつ系統的に学習する段階である。マイクロカウンセリングを用いた臨床心理基礎実習が第1段階に相当し、学ぶ側が一定の型に合わせながら所定の技術や技能を修得していくことになる(長谷川,2007)。マイクロカウンセリングによる訓練は、パイロットがそれなりに航空機の操縦をすることができる「ある程度の訓練」に相当する。航空機の操縦技術は、面接の基礎技能に相当すると考えられる。

パイロットと職人になる心構え(職人養成形式)

『戦闘機乗りは、どんなに多くの味方がいてくれても、最後に頼るものは、自分以外にはない。このように考えて、私は、自分の精神、智能、体力をその極限と思われるところまで、鍛えに鍛えてみた。それは、辛いことであったが、こうしなければ私は空中戦に勝ち抜くことはできないと思ったからだ(坂井,1994)。』

上述の坂井の気概は、対人援助職に限らず専門職に共通して求められる姿勢であろう。臨床心理士を含む対人援助職の仕事は、持ちうる力を十分に発揮してクライアントに役立つかわりを持つことである。役立つかわりができないようでは、空中戦に負けたも同じであろう(面接が勝ち負けではないことは理解した上での記述である)。専門分野に限定しないで、つまり分野を問わないでどん欲に学んでいこうとする姿勢は、対人援助職が獲得した知識・能力・技能を十分に発揮する基盤になる(次節に関連する)。この心構えは、長谷川(2007)が職人養成形式として指摘した「手探りで修得すべき事柄(型)を探し出して、学び取っていくこと」に相当する。

航空管制官と初回面接

航空管制官は、航空機の位置や高度を考慮に入れて各航空機の間隔を調整する役目を果たしている。すべての航空機は、この管制官の調整なしには空を飛ぶことはできない。管制官へのインタビューを引用する(加藤,1996)。『パイロットというのは劣悪な条件の中で仕事をしている人たちなのです。それを助けてやるというのが管制官の仕事なんです。(中

略)パイロットは自分の周波数にいるのは、5分か10分しかいない。どんどん流していきますから。その間に、最初の交信で「あ、この人だったら大丈夫だ」という感じをパイロットに与えないと行けない。与えすと、パイロットは言うとおりについてきます、うまくやれば。ところが、「こいつ、ちょっと怪しいな」と思うと、パイロットが言うとおりに動いてくれない。「こいつの言うとおりにやっても大丈夫なのか」と、パイロットがもしも疑問を感じながら飛んでいるとしたら交通はうまく流れない。』

対人援助職がクライアントとの初回面接に、この人で大丈夫なんだろうかと疑問を持たれるようでは、その後の専門的支援において、専門技能を十分に発揮することができなくなる。クライアントが安心して話してもらうために対人援助職の姿勢として必要なのは、安定感、安心感、そして平常心であろう。この人に自分のことを任せてみよう(話してみよう)、この人の言っていることに乗ってみよう(聞いてみよう)とクライアントに感じてもらうことが初回面接で必要な条件となってくる。このための基盤には、上述の職人養成形式につながる心構えや気概から生まれる専門職自身が醸し出す雰囲気も重要な要素となる。また、この雰囲気は全面接過程を通じて専門職から発せられ、専門職としての役立つかわりにも影響を与えるものと思われる。

専門職としての流儀

管制官はいろいろな状況に応じて、たくさんの「パターン」をもっている。管制官は航空機の状況に応じて「たくさんあるパターンの中から一つのパターンを選び出す」ことをしている。ある管制官のインタビューを次にまとめた(加藤,1996)。『管制に余裕がある場合にはいろいろな誘導法があります。そういうときには管制にも個性が出ます。しかしたくさんの航空機があると、管制方式にはほとんど同じになって、管制官の間で差がなくなります。』

対人援助専門職は、一見したところ、個人として

様々なやり方を持っているようである。しかし、学習者は、いずれ養成訓練の中の事例検討会におけるディスカッションを通じて気づくことになるが、例えば、多種多様な専門職のかかわりにも重要な転換点やかかわりの要所となる共通点が多く存在していること、つまりほとんど同じになっていると気づくようになる。つまり専門職の中の流儀に触れ、次第に馴染んでいくことになる。

おわりに

他分野・他領域から学ぶ姿勢は、臨床心理士という対人援助専門職を続けていく中で、徐々に大きくなっているテーマである。これは自身への戒めであるが、実践について適切な説明や解説する言葉を十分に持ち合わせないことを自覚しており、本論をまとめる試みは一つの壁でもあり同時に挑戦でもあった。本論が、この領域において学び方や教え方を考えることを刺激するひとつとなれば幸いである。

文献

- 長谷川明弘 2007 大学院教育に携わって～備忘録を紐解きながら、これからの教育の方向を考える～, Hearty (金沢工業大学臨床心理センター報), 3,45-48.
- 加藤寛一郎 1995 零戦の秘術 講談社+ 文庫
- 加藤寛一郎 1996 管制官の決断 講談社+ 文庫
- 坂井三郎 1994 大空のサムライ 光人社